

加賀藩手木足輕と氷室に関する覚え書き

竹井 巖

A note on the foot soldiers "Teko-Ashigaru" of the Kaga domain in the  
Edo era and those relations with the snow cellar "Himuro"

Iwao Takei

## 加賀藩手木足軽と氷室に関する覚え書き

竹井 巖\*

A note on the foot soldiers "Teko-Ashigaru" of the Kaga domain in the Edo era and those relations with the snow cellar "Himuro"

Iwao Takei\*

*Received October 31, 2018*

*Accepted November 13, 2018*

### Abstract

In the Edo era, there were the foot soldiers "Teko-Ashigaru" in the Kaga domain. They had been engaged in managing the gardens in Kanazawa castle and carrying official cargoes of the domain. They had to have the necessary qualities of big and strong men; it was known that they "Teko-Ashigaru" had a lot of anecdotes about very strong men. In addition, they had maintained the snow cellar "Himuro" situated in the "Gyokusenin-Maru" garden of Kanazawa castle, and were probably technical experts at taking care of the snow-ice stored in the domain. Matters of the "Teko-Ashigaru" and "Himuro" were collected and discussed by using historical documents connected with the Kaga domain.

### 概要

江戸時代の加賀藩では、「手木足軽」という職制があった。この手木足軽は、藩の庭園管理を主務とし、藩の荷物運搬にも携わっていた。この足軽は、「大男」で「剛力」であることが資質として求められ、「剛力」に関する特異な逸話も伝えられている。特筆すべき事として手木足軽は、金沢城の玉泉院丸庭園にあった雪を貯蔵する「氷室」の管理維持を担当しており、藩の雪氷利用を担当する技術職集団であったことである。この「手木足軽」と「氷室」について、加賀藩資料の関連記事を整理して論じた。

### はじめに

江戸時代に加賀藩では、「手木足軽」という藩機構末端の職制があった。明治時代に加賀藩文書の整理分類に携わった旧藩士(陪臣)・県吏員の森田平次(柿園)氏による『金澤古蹟志』には、

<sup>1</sup> 「○手木足軽来歴 手木足軽は、舊藩中露地奉行の支配にて、城内等の御露地方の諸事を

---

\*薬学部 Faculty of Pharmaceutical Science

専務とし、藩侯江戸参観の時は荷物の宰領を勤めけり」

また

<sup>2</sup>「○玉泉院丸氷室 此の氷室は、舊藩中は藩侯の召し上がるゝ冰雪を貯うる室にて、玉泉院丸の築山の麓に、二間に四間許の穴蔵を造り、戸室石にて積み立てたり。右氷室は手木足輕の主附にて、毎歳嚴寒の頃清潔なる積雪を箱詰めになし、此の室に納め、夥多の雪を集め箱の廻りを詰め置き、六月朔日に取出し指し上ぐる例なりしと云ふ」

とある(下線は竹井、以下同)。加賀藩においては、「手木足輕」は城内等の庭園(および氷室の日に関係した貯雪施設「氷室」)の諸事を専門とし、金沢から江戸への荷物運搬に携わっていたとされる。図1に示すように宝暦5年(1755)の『玉泉院丸絵図』(金沢市立玉川図書館蔵)では、絵図の中に「手木足輕」や「氷室」の文字を確認することができる。

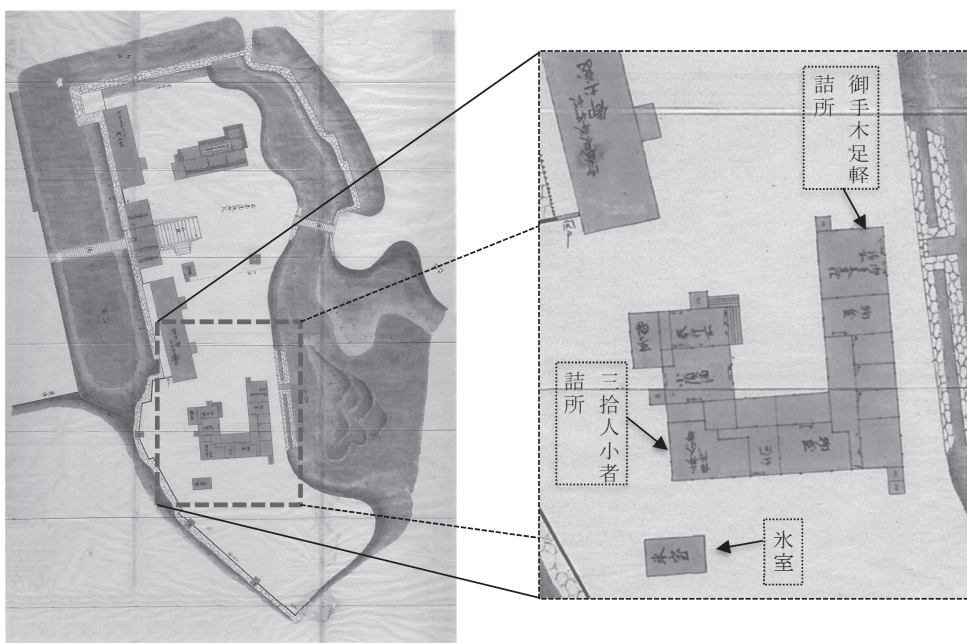


図1 宝暦5年(1755)『玉泉院丸絵図』(金沢市立玉川図書館蔵)。右拡大図には、中央建物の泉水側部屋に「御手木足輕詰所」、および下部の長方形の建物に「氷室」の文字が確認できる。

この手木足輕が注目されるのは、<sup>3</sup>大正時代末の氷業界誌「冷凍」の天野米作『日本に於ける製氷の歴史に就て』に引用された「前田家に仕えていた古老の話」において、以下の様に加賀藩からの「徳川幕府への献氷」に関連して言及されているからである。

「金澤城内二の丸に二間四方の穴蔵が造られ 冬期當番の足輕(手木足輕)が毎日雪を其穴蔵に詰め込み貯蔵したもので 献氷の際には金澤から江戸迄の長い道中を長持ちの中に木の葉や笹を以て氷を詰め足輕が運んだとのこととであります。」

この大正時代の聞き書きの内容は、上述の明治期の『金澤古蹟志』の記述にある「手木足輕」が、金沢城内にあった氷室の維持管理に従事するとともに加賀藩の運搬業務に携わっ

ていたことと矛盾はない。その上で、加賀前田家から徳川将軍家に旧暦 6 月朔日の氷室の日に氷を献上していたことに「手木足輕」が関与していた、とある。

加賀藩の「手木足輕」については、森田の『金澤古蹟志』の「手木足輕来歴」の項に、その役職の設立経緯や役割および「手木足輕」の特異な逸話などについて文献等に基づいた詳しい言及があるが、手木足輕がこの「徳川幕府への献氷」に関与していたという言及は認められない。それどころか、加賀藩の将軍家への献氷は、江戸時代末期に江戸の庶民にはよく知られていた歳時記のひとつであったが、加賀藩の文書には言及が見あらず、地元金沢の庶民は（おそらく）知らなかったらしい（竹井『金沢「氷室」考』）。

本小論は、加賀藩の関係文献上に現れる「手木足輕」と「氷室」についての記述を整理し、この特異な加賀藩「手木足輕」の実像に迫ることが目的である。

## 「手木（てぎ）」と「手木（てこ）」について

『金澤古蹟志』によれば、「手木は軍役定書などに見えたる三尺棒の事也。此の棒はテギと呼べれど、持つ者をばテコ役など言えるは古稱なるべし。」とあるので、「手木（てぎ）」と「手木（てこ）」の用語の意味を明確にしておくことは、当議論に混乱をもたらさない上で有用であろう。

「手木（てぎ）」は、国語辞典や歴史用語集では、①十手の別称、②紐を締め付けるのに用いる短い木の棒を意味するなどとある。一方、「手木（てこ）」についての項目は見あたらない。「てこ」の言葉については、「梃子」「手子」の字が充てられ、①支点とともに用いて重量物を動かしたりする棒状の用具「テコ」の意味で用いられ、関連して②鍛工、土工、石工などの下働きとして手助けをする者のこと。「手子」「梃子の衆」などの用例がある。

**加賀藩の武具「手木（てぎ）」** 年不詳の資料ながら加賀藩の軍制に関連した文書『陣殉の制規』に、細工所からの貸し渡しの武具として「手木」の記載がある。また、『合戦備押』に軍装において「一、手木壺本宛左ニ可刺事」などの行軍時の装着の規定があった。<sup>4</sup>加賀藩穴生の後藤彦三郎による『金城深秘録』には、微妙院様（三代藩主利常）のころから「手木長さ二三尺許先をほそめ木刀様にして、城乗越之節石垣へ指込々々段々上る也」と城攻めの際の使い方が示してある。昔に築かれた「御石垣あらき積方」のものは、「手木の心得」を以て積み直すべきことが述べられている。これらの「手木」は「てぎ」と読むべきもので、武具の一種として認識されていた木の棒の「手木(てぎ)」が加賀藩にはあったことを示している。

**石垣普請の「手木（てこ）」** 一方で「手木」や「手木之者」「手この者」などの表記が、加賀藩関連資料における石垣普請場などの場面で散見される。徳川幕府の発足とともに、天下普請の城作りに諸大名が動員されるが、加賀藩も三代藩主利常の時代に駿府城(1607)、大阪城(1620)、江戸城(16336, 1658)などに莫大な人員と経費の負担を提供している。例えば利常と五代藩主綱紀による明暦 4 年(万治元年)(1658)江戸城天守台の石垣普請で、

「手木之者毎日五百・七百・千人計も入候事在之、右之内二百人ハ照降ニ不抱入不入ニ不寄日用を取、御小屋ニ罷在御ふち人同前ニ御ふち被下候也、之ハ余人ニやとわれ御事欠さる様ニ可被下候也」(『江府天守台修理日記』)

とあり、日用人足としての「手木之者」が晴れ雨に関係なく 200 人確保されていた。『金城深秘録』には、この石垣普請に「手木と申して大阪より被召寄二百人有」、「江戸手木」などの記述もある。この場合の「手木」は「てこ」と読み、「梃子の衆」「手子」などの「石工などの下働きとして手助けをする者」を、当て字で「手木」と記載したものと考えられる。したがって、加賀藩史料で「手木」を「てこ」と呼ぶとき、それは石のような重量物



を取り扱う技能者を指す言葉として使われていた、として良いであろう。

江戸城天守台石垣普請における加賀藩関連資料では、大石を波止場から普請場に修羅を用いて「手木之者」達が石引運搬するときに、加賀藩主から提供された装束で着飾った「きやりの者」が大石の上に乗る、種々の狂言ものまねを云ってにぎやかに石引きの音頭をとる様子が記述されている。

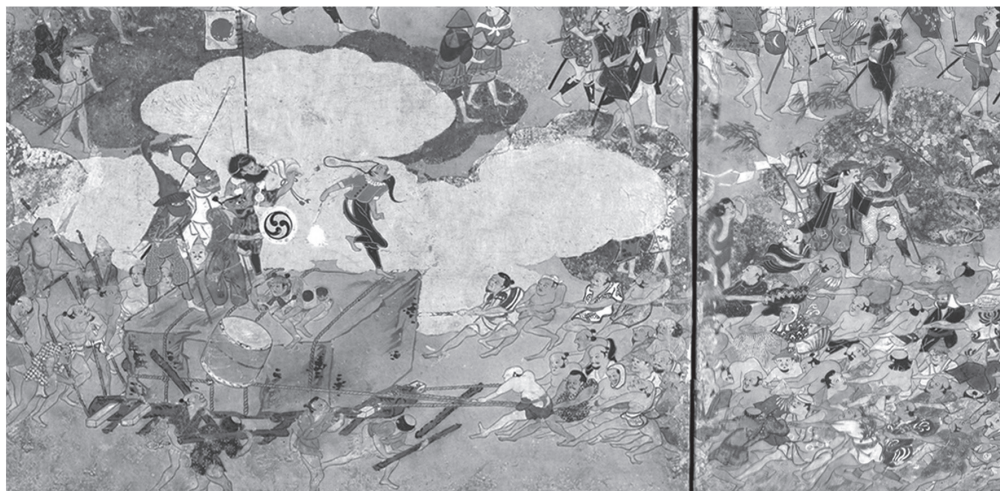


図2(1) 『築城図屏風』(名古屋市博物館蔵)第5,6扇下部。修羅に大石を乗せ、大勢の人足が引いている。石の上には木遣りの者、梃子木で石の進む向きを調整する「手木之者」。



図2(2) 第2扇上部。石垣を積み上げる石工とその位置調整の補助する「手木之者」。



図2(3) 第1扇中央部。詰め石を籠で運ぶ人足。梃子木・杖を持っている。

図2に示した名古屋市博物館所蔵の『築城図屏風』は、能登の旧家が所蔵していたもので、慶長12年(1607)の加賀藩の駿府城の石垣作りの石引の様子を描いたものではないかとされる。ここでは、図2(1)に示すように大石を修羅にのせて多数の人足が綱を引き、大石の上には異形の装束を身にまとった「木遣り」と思われる数人が舞い指図する様子が生き生きと描写されている。ここでは修羅の下に転がし丸太を置き、「手木の衆」が梃子木

を扱って進む向きを制御している様子が描かれている。同屏風絵には、梃子木を扱って石垣の石の設置を調整している「手木の衆」(図2(2))や、梃子木または杖を手に持って編み籠に小石を入れて運ぶ人足(図2(3))の様子も認められる。加賀藩資料で言及された「てこ」「手木」「手籠」「手木之者」「手この者」は、この屏風絵図における石垣普請の梃子木を扱う人足たちを意味しているのであろう。

**仙台藩の手木** 佐藤宏一『手木の系譜』には、仙台藩白老陣屋の普請に関わった仙台藩が派遣した職人の中に「手木」と呼ばれる者がいたという。白老仙台藩陣屋跡の藩士の墓地の、「手木惣兵衛」と記された墓石に言及している。この仙台藩の「手木」は、「高所での作業が自在なこと、木梃やコロを駆使する技術等、さらには、古風な年中行事に助けられて存在している職人」で、蝦夷地の普請場の過酷な作業を担当していたとある。仙台藩の資料から「てこ。手木・手木頭という有り。手木は連枝がたの駕籠なども昇也。木梃。(『浜萩』著者・著作年代不明)」の引用があるので、この場合の「手木」も「てこ」と呼ばれていたようである。加賀藩では、藩主や連枝の駕籠を担ぐ小者は「御陸尺」「六尺」などと呼ばれていたが、仙台藩では連枝の駕籠は「手木」が担っていたらしい。

## 「手木足軽」の実態について

**加賀藩手木足軽** 加賀藩関連資料において「手木足軽」が初めて資料上に現れるのは、「延宝八年七月十七日手木足軽之内、森田六兵衛江戸吉原へ罷越、足軽小林次右衛門を切殺す、依之六兵衛死刑に処せらる、六兵衛は手木足軽三十余人の内にて、無双の剛力なり、凡五十貫目許の大石を持運び、或は八十貫許の荷物を心易く持由也」(『葛巻昌興日記』)

にあるように、延宝8年(1680)の江戸吉原を舞台とした場面が初出と思われる。『可観小説』の「手木足軽金田兄弟の大力」と題された記事には、「正徳四年(1714) 御家の力者、手木足軽金田市五郎・大右衛門兄弟二人、深川八幡社へ参詣候處、社前に大石あり。」で書き出され、八十貫の「力石」を「手木足軽」が持ち上げたという江戸深川での逸話が見られる。どちらの逸話も、手木足軽が示す特性としての「無双の剛力」「大力」が言及されている。

上述のように、延宝8年(1680)の手木足軽の員数は「三十余人」であったのに対し、宝永6年(1709)には「四十八人御手木足軽」(『可観小説』)とあるのは、これらの時期の地元金沢での手木足軽の人数の規模と思われる。これらの逸話が江戸を舞台に引き起こされているのは、手木足軽が金沢から江戸に出てくる機会を持っていた事を示している。

**手木足軽と力石** 手木足軽の森田六兵衛の剛力や金田兄弟の力石の逸話は、手木足軽が尋常ならざる「力持ち」であることを示している。江戸時代初期以降、力自慢や力比べの一つとして、寺社の境内における「力石」の催しが盛んに行われるようになったとされる。高島慎助『石川県の力石』には、力石に関連して石川県でも「盤持ち石」「バンブチ」と呼ばれる行事が、力比べや一人前と認められるための通過儀礼として、かつて県内各地域で行われていたという。調査された力石の中には、加賀藩の手木足軽由来のものもあり、金沢の尾山神社本殿右横には「奉納 之御手木中」「奉納 舊藩主前田家ヨリ 拝領石 之御手木中」「さし石」と刻まれた石があり、富山県小矢部市藪波地区次郎島の地藏堂そばには「前田藩のお抱え武士お手強(近衛兵)」であった「浅井権兵衛」が持ち帰ったと伝えられる百貫青大石の「お手強石」が置かれているという。

**手木足軽の器量** <sup>1</sup>森田が『金澤古蹟志』で触れているように、手木足軽は「召抱えの時力量の検査ありて、殊に大男を選擧せり」とあり、手木足軽には「力持ち」で「大男」であることが求められた。それは、庭普請や荷運搬での手木足軽の役割や力石の逸話などか

らもうなずける。加賀藩には、藩直属の足輕・小者を管轄する割場とよばれる機関があった（森下『加賀藩割場と足輕・小者』）。加賀藩の『御定書』の中に割場での足輕の召し抱えの基準として「きりよう(器量)がんちやう(頑丈)ゑらひ(選び)可召置」とあるが、手木足輕はさらに「力持ち」で「大男」が選ばれるための「器量」となっていたようである。

『大梁公日記』安永二年(1773)12月には、「手木小頭二名」が老齡のためお役御免となり、代わりに「京都手役者」が推挙されて召し抱えられている。この能の「手役者」には、手木足輕小頭として求められる「器量」に、「力持ち」「大男」以外になにか特殊な「技能」があったのだろうか。能の演目『氷室』に関係するのかもしれない。天保年間(1830-44)『若年寄役の勤方例規(抄)』には、御手木足輕が病死したので、その跡継ぎの申請が出された顛末が記されている。支配の三十人頭により、その「養子御手木器量無之者ニ候間、割場附足輕ニ被召抱候様願」(跡継ぎが手木足輕としての器量が無いので、割場附足輕に召し抱え変更の願い)が出され、「割場附足輕ニ被召抱」えられたとある。これらのことから、手木足輕には一般の足輕とは異なる「器量」が求められていたことが推察される。

**手木足輕の居住地** 江戸時代に手木足輕が住んだとされる金沢の手木町は、現在の町名の本多町1丁目である小立野新坂下にあった。<sup>5</sup>『元禄六年侍帳』(1693)にある「本多図書 本多安房守下屋敷おてこ町方」が、金沢での居住地「おてこ町」の初出である。この場所は、寛永8年(1631)に利常が家中の子弟を抜擢して御手廻り衆の「三十人」組を設置して(「利常公御手廻の者被召抱事」『三壺聞記』)、その組地の「三十人町」があった場所で、絵図(『延宝金沢図』(1674)、石川県立図書館所蔵)により確認できる。後に三十人組の組地は別の場所に移って、手木足輕の組地になったのであるが、享保9年(1724)の資料によると、「手木足輕」が三十人頭の配下でもあったことが確認できるので、加賀藩手木足輕の来歴を考える上で興味深い。

**手木足輕の職制上の位置** 加賀藩の職制においては、『国格類聚』に編集された享保9年(1724)の『平士役之支配』に、「三十人頭支配 三十人組小頭共手木之者 御陸尺 鳶之者」とあり、手木足輕は平士である三十人頭の配下で、藩主の手廻りを任務とする三十人者、藩主やその縁者の駕籠を担ぐ「御陸尺」および「鳶之者」と同じグループに入っている。その俸給は「百石ニ御役料五拾石 三十人頭」「三拾五俵高 手木足輕小頭」「三人扶持御給金六両二歩 手木足輕」とある。ちなみに、身分が小者である御陸尺は「老人半扶持御給金七両式歩」、御抱鳶之者は「同(御扶持一日) 壹升宛御給金一月三歩三匁」および三十人者は「一人半扶持御給銀百目年中料銀貳枚」となっている。

**手木足輕の員数** 『葛巻昌興日記』による、延宝8年(1680)の手木足輕の員数は「三十余人」であった。『可觀小説』には、宝永6年(1709)の加賀藩の足輕員数が2649人で、「御手木足輕」は48人となっている。『天明3年(1783)士帳』には、御手木小頭8名、御手木足輕39人(他に三十人組小者の「御手木御手廻」が89人)とあり、時代は下って『国格類聚』の文化9年(1812)『近年諸組御人高大概』に、手木足輕の数は、加賀藩地元で「手木足輕 五拾人 外小頭八人」、江戸下屋敷で「手木足輕九人 内老人小頭、老人仮横目但定府」とある。地元金沢での手木足輕は、50人規模で推移しているようである。また、江戸在住の9人の手木足輕は、中仙道板橋宿にあった加賀藩下屋敷に所属しており、下屋敷の宏大な庭園敷地を維持管理していたものと思われる。

**手木足輕の出自** <sup>1</sup>森田の見解(手木足輕の来歴)では、手木足輕の出自は五十人相撲組から来ているという。この五十人の相撲組は、寛永11年(1634)に利常が玉泉院丸庭園を造園するときに鉄砲組百人とともに庭普請役として組織され、造園に必要な大石の運搬や泉水の作庭などに働きがあった。この相撲組五十人が、後に手木足輕に再構成されたのではないかという。この時の玉泉院丸庭園は、京都から庭師「剣左衛門」を召し寄せて、能登より「大石、植木」を取り寄せるなどして「築山、泉水、御亭」の作庭に当たらせたと



いう。庭石などの重量物の取り扱いで作庭に従事した相撲組が手木足輕につながるならば、露地方役所で金沢城の庭園普請・維持管理が主務であった手木足輕の出自についての森田の説もうなずける。手木足輕の藩の職制構成では、ほぼ五十人規模であることにも矛盾はない。

上述の逸話のように手木足輕が資料上に現れるのは、五代藩主綱紀の時代以降である。延宝4年(1676)に当時作事所があった蓮池の場所は、綱紀により新たに御亭を建て蓮池庭として整備されることになる。一方、三代利常が小松に隠居後放置されていた玉泉院丸庭園には、当初厩が設けられたが、貞享5年(元禄元年)(1678)に招聘した千宗室に作庭を命じて、厩などの撤去や御亭の設置など庭園の再整備が進められている。寛文元年(1661)に19歳の綱紀が初めて金沢に入国して以降、藩の組織は延宝期から元禄期にかけて大幅に制度改編されたので、この機会に庭園の普請や管理に手木足輕という役職が設置されたのであろう。図1に示した宝暦5年(1755)『玉泉院丸絵図』には、玉泉院丸敷地の建物に「氷室」と「御手木足輕詰所」「三拾人小者詰所」の文字も確認される。

宝暦9年(1759)金沢大火で、金沢城は二の丸御殿をはじめとして主要施設がほとんど焼失した。この時被災した蓮池庭は、後に十一代藩主治脩により安永2年(1773)に復興される。治脩は手木足輕について、安永2年12月に蓮池庭の滝普請にあたっていた「手木共五十人」(手木足輕50人)へ酒代を給したことや、安永3年6月朔日には完成した滝を検分に行き、庭に棲みついていたむじなの親子を「手木共」(手木足輕)が捕まえて食べたことと側近から伝えられたことなどを『大梁公日記』に記している。十三代藩主斉泰の『公私心覚』には、玉泉院丸の庭園に滝を設ける工事に従事した「主付の三十人小頭・手木足輕小頭・手木足輕・三十人手伝いら」102人に酒代の下付したことが記載されている(長山『兼六園を読み解く』)。この庭園の滝(石組み)普請は、石のような重量物を扱う作業者「手木」の呼称が、手木足輕に使われる理由を指し示している。

<sup>1</sup>森田は、このような庭園管理を専務とする「手木足輕」と藩の荷物運搬を司った「宰領足輕」との関係にも言及し、手木足輕の運搬業務におけるつながりを示唆している。『三壺記』には万治元年(1658)の江戸城天守台普請の記事に、

「御家中より御入用割附して、知行高に応じ取立先四千貫目、原田五右衛門・中村新丞・

津田孫十郎・平井次郎兵衛に裁料足輕五十人指添へて江戸へ到着す。」

とあり、「裁料足輕五十人」が石垣普請にかかわる資金「四千貫目」を江戸へ運搬したことが言及されている。天守台石垣普請の記述に現れるこの五十人の「裁料足輕」が、庭石運搬で活躍した「五十人相撲組」であれば、藩の金品運搬人としては心強いことである。藩機構に「宰領足輕」の職制はないので、森田の言及する「宰領足輕」は、金沢と江戸京都間の藩の金品運搬や、藩の行列での荷の「宰領」を担っていた足輕のことであろう。

津田政隣の『政隣記』には、延宝2年(1745)4月の但馬守(八代藩主重熙)の行列に「御武具宰領足輕」の記述があり、40年後の天明6年(1786)6月の泰雲院(十代藩主重教)の葬送行列では「御武具才許足輕」の記述が認められる。「手木足輕」についても同文書に、延宝3年(1746)12月の七代藩主宗辰の葬送行列での棺台の近くに「御陸尺」とともに配置されていたことや、上述の天明6年の葬送行列でも葬列の主要部に多数参加していたことが確認できる。従って、「宰領足輕」と「手木足輕」は同時代に異なる役目で存在していたことになる。近世中後期には、藩の割場附の小者は「才許足輕」に統制されるようになった(『加賀藩割場と足輕・小者』)ことを考えると、江戸初期はともかくとして、「手木足輕」と「宰領足輕」の役割上の関係は無さそうである。

整理すると、「五十人相撲組」が天守台石垣普請に関連して現れる「裁料(宰領)足輕五十人」であれば、森田の説も成り立つが、確証はない。歴史的には、三代藩主利常の時代の「五十人相撲組」が、何らかの経緯を経て五代藩主綱紀の時代に露地担当の足輕として「手



木足輕」に再編成された、と単純に考えていいのだと思う。いずれにしても、手木足輕は、庭園普請と管理を主務とし、一方で藩の行列に関与していたことは確かである。

表1 手木足輕と氷室に関連した出来事

時代区分	主な出来事	年次	所載文献
三代藩主 利常の時代	駿府城石垣普請 大阪城石垣普請 三十人組御手廻り 江戸城枳形石垣普請 江戸城天守台普請 「てこ」「手木の者」 玉泉院丸庭園作庭 「御相撲五十人組」	慶長 12 年(1607) 元和 6 年(1620) 寛永 8 年(1631) 寛永 13 年(1636) 明暦 4 年(万治元年) (1658) 寛永 11 年(1634)	『三壺聞記』 『三壺聞記』 『三壺聞記』 『三壺聞記』 (『江府天守台修築 日記』) 『三壺聞記』
五代藩主 綱紀の時代	蓮池の御座敷と庭 「手木足輕」森田六兵衛の剛力 玉泉院丸庭園千宗室 玉泉院丸氷室設置？ 「おてこ町」 「御手木足輕」48 人 「手木足輕」金田兄弟の力石 「手木足輕」職制と給金 六月朔日巡検使への「氷贈遣」	延宝 4 年(1676) 延宝 8 年(1680)江戸 元禄元年(1688) 元禄 5 年(1692) 元禄 6 年(1693) 宝永 6 年(1710) 正徳 4 年(1714)江戸 享保 9 年(1724) 宝暦 5 年(1755)	『葛巻昌興日記』 『葛巻昌興日記』 『葛巻昌興日記』 『作事所舊記』 『元禄六年侍帳』 『可観小説』 『可観小説』 『国格類聚』四 『政隣記』
十一代藩主 治脩の時代	六月朔日老中への「氷贈遣」 蓮池庭「手木足輕」50 人酒代 蓮地庭「手木足輕」むじな食 十代藩主重教の葬送行列	安永 2 年(1777) 安永 2 年 10 月 6 日 安永 3 年六月朔日 天明 6 年(1786)6 月	『大梁公日記』 『大梁公日記』 『大梁公日記』 『政隣記』
幕末期	「御手木足輕」39 人 「手木足輕」金沢 50 人江戸 8 人 加賀藩の氷献上	天明 3 年(1783) 文化 9 年(1812)	『天明 3 年侍帳』 『国格類聚』五 『東都歳時記』

## 加賀藩の「氷室」について

**氷室の歴史** 中国においては、古くから冬期に氷室で貯蔵した氷を夏に利用することが行われており、用途としては飲食物の冷却や遺体の保存などに用いられていた（『宋書』）。日本における氷室の歴史は、『日本書紀』（710）に記載がある大和の国の都祁氷室の言及から始まり、近畿一円の官営氷室の経営とともに平安時代には4月から9月の期間に天皇家で大規模に氷を利用するようになる（『延喜式』）。その後、富士の雪の鎌倉幕府の利用なども一時期あり、室町時代の戦国の世には氷の貯氷機構自体が機能しなくなる。それでも朝廷では、六月朔日の献氷が細々と断続していたことが確認できる（『金沢の氷室と雪氷利用』『金沢「氷室」考』）。

その後六月朔日には、慶長 11 年(1606)徳川家康への伊吹山の氷の献上および家康から

御所への氷献上（舟橋秀賢『慶長日件録』）や江戸時代前期の将軍家への富士山の雪の運搬（『徳川実紀』）、また、利常金沢入城（1584）以降の加賀前田家への倉谷四ヶ村からの氷献上（『作事所舊記』）などが伝えられている。江戸時代には、

「六月初一日 節序 賜氷節 昔日今日、自丹波或処々氷室 献氷於 禁裏。或賜群臣。」とあるように（黒川道祐『日次紀事』貞享2年（1685））、六月朔日が宮中の賜氷の節に由来することが流布され、歳時記などで庶民にも「氷室の日」が意識されるようになった。

古代大和の都祁地域の氷室遺跡は、丘陵上のすり鉢状の土坑穴として多数確認されている。氷の採取や貯蔵は、気候的条件から冬に冷え込む高原の都祁地域のような場所で行われた。このような氷利用は、冬期の氷池から切り出した氷を、土坑の氷室に埋設貯蔵して、夏期に利用するものであった。江戸時代初期（寛永4年（1627））後水尾天皇が上皇となる時に幕府により造営された京都仙洞御所（小堀遠州作庭）には、「お冷やし」と呼ばれる氷を貯蔵したとされる二間三間深さ4m規模の氷室があり、二段石造りの穴蔵（石階段付）であった（<sup>6</sup>桑野『仙洞御所「お冷やし」参観記』）。また、明暦大火（1658）以降に江戸城から御三家の屋敷が退去した跡地に吹上の庭が造園されて氷室が設けられ、将軍家での氷室の祝いの行事に利用された（<sup>7</sup>『徳川礼典録』）。江戸時代には、気候条件の適した藩が貯氷や貯雪施設としての氷室・雪室（<sup>27</sup>都府県）を設けていたことが報告されている（<sup>8</sup>和泉他『江戸時代における雪氷献上の雪氷・気候学的検討』）。これらの氷室・雪室は、氷室の日に藩主へ献上する氷を得るために設けられたものが多い。

冬期の気候が比較的温暖で多量の降積雪がある金沢においては、氷の代わりに山陰の残雪または城内穴蔵に貯蔵した雪を、氷室の日の行事の氷に利用していた。金沢を流れる犀川の上流倉谷四ヶ村から、利家の金沢入城の際に氷が献上されて以来、金沢城に氷室が設置されるまで藩主や連枝への6月朔日の献氷がなされたという（『作事所舊記』）。また、金沢城下では江戸時代後半に6月朔日の氷売りなども行われていたといい、金沢の庶民にとっても氷室の日の雪氷は身近なものであった（<sup>9</sup>『五節句集解』『鶴村日記』）。

**玉泉院丸氷室の設置時期** 金沢城玉泉院丸の氷室は、元禄5年（1692）に設けられたとされる。これは、『改作所舊記』に犀川上流の倉谷四ヶ村から藩主への六月朔日の氷献上に関連して、①村役からの元禄14年の提出文書にある「元禄五年迄上来申候。同年より中絶、上不申候」との氷献上中止時期の記述、および②元禄11年の公文書の「近年者御露地に氷室被仰付置候得共、今年者無之に付」（近年は氷室の氷を用いていたが、今年は得られなかったの）村宛に氷一荷持参するようにとの指示の記述、の2点から推測される。厳しく言えば、玉泉院丸氷室の設置時期に明確な証拠があるわけではない。もちろん、貞享5年（元禄元年）（1678）6月に綱紀が千宗室に玉泉院丸に作庭を命じ、9月には厩（寛文元年（1661）設置）などを撤去して御亭の普請が進められている。この玉泉院丸庭園の新たな改修に元禄元年から着手しているので、氷室の設置もこの流れの中で出てきたことはあり得る。

ところで、<sup>10</sup>加賀藩穴生の後藤家文書の『高石垣等之事』には、利常隠居（寛永16年（1639））後に玉泉院丸に鼠多門や土蔵の普請が行われたが、「右御土蔵御出来之節氷室茂被仰付様ニ被存候」とあり、玉泉院丸の土蔵完成の時期に氷室の設置を指示されたと読める記述も認められる。そうであれば、利常または四代藩主光高によって氷室の設置が指示された可能性も生じる。玉泉院丸氷室の設置時期については、検討が必要かもしれない。

**玉泉院丸氷室の構造** 宝暦5年（1766）に幕府から巡検使が来たとき、金沢城について多くの提出書類が作成された。その時期の絵図から、玉泉院丸に「氷室」が存在したことが確認できる。森田は『金澤古蹟史』で玉泉院丸の氷室について、氷室の規模が二間四間の戸室石を積み立てた穴蔵であるとしている。宝暦5年の『玉泉院丸絵図』（金沢市立玉川図書館）から玉泉院丸の氷室が長方形の施設であること、宝暦9年大火以前とされる時期不詳

の『金沢城御殿絵図』(同)に書き込まれた文字から「穴」であることは確認できるが、数値的な記述や戸室石造りであることは、森田の言及以外に確認できない。もちろん、加賀藩穴生の後藤家などが氷室の築造に関与していたのなら、戸室石造りの穴蔵であってもおかしくはない。森田の生きたのが江戸末から明治にかけてであるので、森田には実見なり伝聞なりで確認できたのであろう。玉泉院丸は宝暦9年の大火で被災しなかったこともあり、大火以後の絵図などでも同様の場所に「氷小屋」の記述が確認できる。

ところで、玉泉院丸氷室の構造について、<sup>6</sup>既述の江戸時代初期(寛永4年(1627))に造営された京都仙洞御所の氷室「お冷やし」が、興味深い存在である。「お冷やし」と呼ばれる氷室は、二間三間深さ4mの二段石造りの穴蔵(石階段付)であった。金沢城玉泉院丸における二間四間の石造り穴蔵の氷室は、この京都仙洞御所の「お冷やし」と同規模である。利常の娘が京都の公家に入嫁したことや綱紀の公家社会への書籍保護収集など、加賀藩と京都の公家社会とのつながりは深い。この「お冷やし」のことも加賀藩には伝わっていたであろう。明暦大火(1658)以降に、江戸城では吹上の庭園に(実態は不明であるが)氷室が設けられた(『金沢「氷室」考』)。时期的には江戸時代初期に築造された金沢城や江戸城の氷室が、仙洞御所の「お冷やし」をモデルとして企画築造されたとしてもおかしくはない。時代が下り規模は小さくなるが、加賀藩本郷上屋敷の地下施設として二段石造りの穴蔵(石階段付)が発掘されており、貯蔵雪氷を用いた冷蔵庫としての使用が推測される(宮崎『大名屋敷と江戸遺跡』、西秋『「加賀殿探訪—東京大学本郷キャンパスの遺跡」展』)。

金沢城は、江戸時代に度々火災に遭遇し、城内施設の焼失や再建が繰り返されてきた。その点から言えば、長い年月の間に金沢城のどんな場所にどんな規模の貯雪施設が存在したとしても不思議ではない。金沢大学が昭和44年に行った金沢城二の丸の部分調査では、江戸初期(寛永以前)の「石室」(地下貯蔵庫、長さ8m幅1m深さ2m、石階段付)が発掘確認されている(『金沢城二の丸跡発掘調査概報』)。金沢城の氷室については、<sup>3</sup>「金沢城二の丸に二間四方の穴蔵」という大正時代の「前田家に仕えていた古老の話」もある。さらには、蓮池庭が拡張してできた兼六園に、氷室があったという伝承もある(小川政成『兼六公園誌』)。金沢城に設置された氷室に関しては、玉泉院丸の氷室以外に存在したかどうかは不明であるが、そのような貯雪施設としての藩の氷室があったとすれば、その貯雪作業や維持管理を担ったのは、50人の手木足輕ということになる。

## 「手木足輕」と「氷室」の関係について

**手木足輕と氷室** 加賀藩手木足輕は、庭園を管理運営し、氷室の主附役人であった。藩の最下級兵士「足輕」であるはずの手木足輕が、なぜ庭園管理の役目を担っているのか。これは、雑務を担当する小者の仕事の範疇ではないのか。なぜ、手木足輕になるためには「力持ち」で「大男」という「器量」が要求されるのか。加賀藩手木足輕の来歴が庭石運搬・庭園普請の五十人相撲組から来ていて、手木足輕に要求された「器量」が「力持ち」「大男」であるなら、庭園普請・管理や荷運搬は確かに有り得そうであるが、その職能は時代とともに変化したのではなかろうか。森下が『加賀藩の足輕・小者の役割の変遷』で指摘しているように、末端兵士身分の作事普請担当の足輕の職能が、平和な時代の中で軍事から離れたとしても不思議ではない。手木足輕の役割が変化したのであれば、おそらく「氷室」の管理運営を担当したことが最も大きな要因ではなかろうか。

金沢城玉泉院丸の氷室は、手木足輕の主附であり、冬期間の雪を氷室に貯え、六月朔日の氷室の日に貯蔵雪氷を藩侯へ供することを目的として設置された。手木足輕は、その業

務全般を担った足輕であった。この貯蔵雪氷を、夏の暑い時期である六月朔日に供するとは、加賀藩にとってどのような意味があったのであろうか。その解答の糸口になりそうな逸話が、加賀藩関連資料にある。

**金沢における氷室の日の氷** 宝暦5年(1755)4月から10月の間に、幕府の巡検使が加賀藩に来て長期滞在し、藩内を巡検調査している。このとき、<sup>11</sup>『政隣記』6月朔日の記事には、能登へ向かう巡検使の一人松平頼母の出立の時の様子が記されている。出立する巡検使に「氷一桶」が係の組頭によって早朝に届けられており、また、残留するもう一人の巡検使大河内善兵衛にも、「饅頭一箱<sup>包のし</sup>・氷一桶」が同様に届けられている。「氷室の日」の贈り物として、「氷」と「饅頭」が用いられている。ここで用いられた氷は、金沢城の氷室に貯えられた雪氷であり、三十人頭とその配下の手木足輕の手で届けられたのであろう。この巡検使に対する扱いは、江戸本郷邸での予めの招待では「御作法十万石以上之御あしらい」とあるので、金沢でも同等の格式で対応したと考えられる。氷室の日の「氷一桶」は、十万石以上の格式の贈り物ということで、また提出図面に玉泉院丸「氷室」が記載されていることとの関連もあるのであろう。

**江戸藩邸の氷室の日の氷** <sup>12</sup>『大梁公日記』の安永2年(1773)六月朔日には、十一代藩主治脩が老中からの私的な要望を受けた顛末について

「○例年之通今日氷室に付、右京太夫（老中、松平輝高）へ氷遣候様候度候、将又板倉（老中、板倉勝清）より茂何卒所望之旨、順阿弥（同朋頭）より昨日太朗左右衛門迄紙面にて申来る」

と江戸藩邸の出来事を記している。この老中の氷の所望に対して、今回限りということで「氷一壺・鯁筋一籠充、同様ニ相贈候事、今朝未明遣シ」としている。これは老中宛の氷贈遣なので、將軍家への氷室の日の献氷が明示されているわけではないが、この頃に加賀藩は、「例年之通」氷室の日に贈るための氷を、江戸藩邸に有していたことがわかる。江戸藩邸の氷室の存在については、<sup>9</sup>安永4年(1775)の舟木長左衛門『五節句集解』にも「御家にては江戸金沢にても御庭の内に被仰付毎年貯申也」との記載から確認できる。

ところで、明和8年(1771)4月に治脩は藩主を十代藩主重教から引き継ぐが、このとき老中たちに世話になっており、襲封御礼として2年後の安永2年(1773)5月18日に老中たちを藩邸に招待している。上述の「老中への氷贈遣」の直前である。この暑い時期の接待として、<sup>13</sup>「客殿の冷装」という多量の氷を用いた部屋冷房を行ったのではないかとされている（『氷の文化史』『金沢「氷室」考』）。更にこの時期、治脩の食膳に氷で冷やされた瓜・西瓜が供されていた（『大梁公日記』）。そうであれば、加賀藩江戸藩邸に大量の雪氷を何らかの方法で貯蔵確保していたことになり、必要な氷の供給能力があったことになる。その雪氷利用全般を担当したのは、手木足輕を主体とした人達であろう。

**葬送行列と手木足輕** すでに「手木足輕の出自」で述べたように、加賀藩の行列で手木足輕の配置を確認したのは、藩主の葬送行列であった（『政隣記』）。七代藩主宗辰は延享3年(1746)12月8日に亡くなった後、江戸(12/28)から金沢(1/18)への葬送行列では、棺台の近くに「手木足輕」が配置されていた。死後40日後に金沢へ遺骸が到着したのであるが、この行列は真冬の12月であり、手木足輕は1人であった。これに対して、十代藩主重教は天明6年(1786)6月12日に金沢で亡くなり、6月26日の野田山への葬送行列では、葬列の主要部に手木足輕が多数（御唐油箱の傍に御手木足輕12人、御棺の傍に御手木足輕、御手廻之者等77人）参加していた。埋葬まで14日間であるが、真夏の暑い6月は遺骸の腐敗が進む時期である。ここで、手木足輕の役目として貯蔵雪氷を腐敗防止に用いたことは想像に難くない。

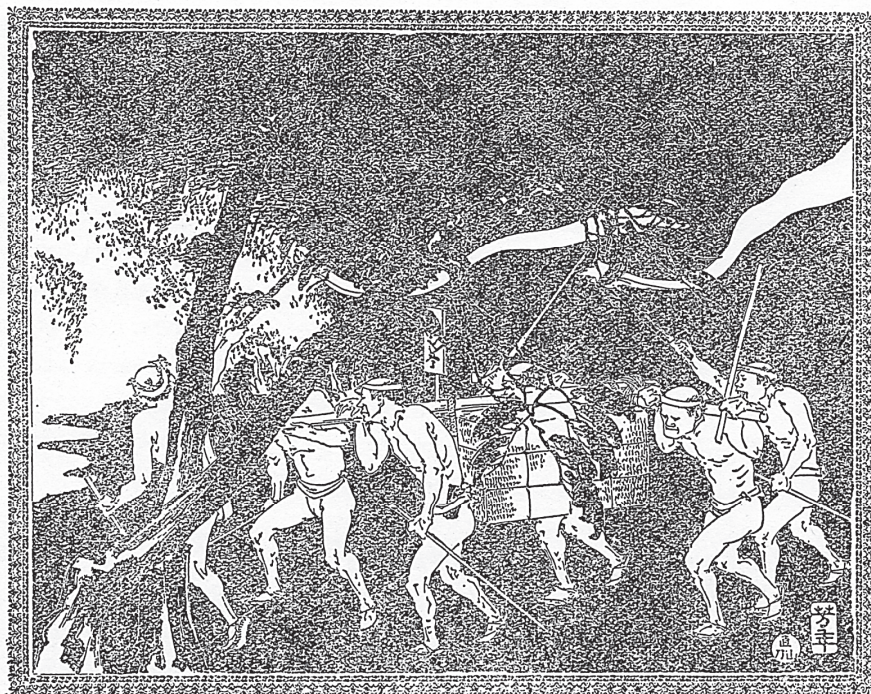
前述したように、古代中国や日本における夏場の雪氷利用では、遺骸の腐敗防止の用途が大きな位置を占めていた（『宋書』『延喜式』）。支配者は死後の様々な行事においてもそ



の政治的な価値が高いために、遺骸の保存は重要であったと推察される。そして夏場の遺骸の安置や移動では、腐敗防止のための雪氷の役割は有用なものだったと思われる。手木足軽が夏場の葬送行列で多数配置されたのは、まさに雪氷利用の専門集団としての役割を果たすためだったと考えられる。

**加賀藩の氷献上** 加賀藩が將軍家に六月朔日の氷室の日に氷を献上したことを示す資料は、<sup>14</sup>天保9年(1838)『東都歳時記』の

「六月朔日 氷室御祝儀賜氷の節 加州侯御藩邸に氷室ありて今日氷献上あり」  
が有名であるが、寛政11年(1799)太田南甫編『ひともと草』にも確認できる。遅くとも1800年代には、歳時記や書き物、川柳などで、この氷献上が江戸庶民の話題に上っていた。六月朔日の加賀藩の雪氷の献上の道筋には、大勢の江戸庶民が見物に繰り出したという(『金沢「氷室」考』)。この將軍家への氷献上には、加賀藩としても献上品の運搬の見栄えには気を遣ったであろう。この時に運搬を担った者は「力持ち」で「大男」の手木足軽だと思われるが、これは板橋の加賀藩下屋敷に配属されていた9名の手木足軽や、参勤交代で江戸に来ていた手木足軽が担ったのであろう。



加州侯雪献上之図の雲助

図3 「加州公雪献上之図の雲助」(和田篤憲『雲助考』所載) 加賀前田家から徳川將軍家への氷献上の運搬を題材にしている。明治期に活躍した月岡芳年の新聞等の挿絵。

図3に資料として引用した「加州侯雪献上之図」は、和田篤憲『雲助考』に載った図である。この昭和期の論文の本文にはこの図の説明が無いのだが、江戸末から明治期に活躍

した絵師月岡芳年の銘があるので、おそらく新聞や逸話出版物等の挿絵で、加賀藩の氷献上の荷運びをテーマにしたものであろう。暑い時期の氷献上は、このような薄暗い早朝に手早く運んだものであった。なお、運搬された氷は、荷姿のまま江戸城大奥の御広敷まで運ばれ、御広敷番の役人に渡された。そこで荷ほどきをされて、御前に上げられるが、手つかずで御台所に下げ渡されたようである（15『定本江戸城大奥』）。

旧暦六月朔日に加賀藩から將軍家へ献氷があったことは、江戸（東京）で出版された文献資料から幕末（明治）期の江戸（東京）庶民にはよく知られていた。しかし、地元金沢の文献等では大正期末以降にしか記述が確認されていない（『金沢「氷室」考』）。地元金沢では加賀藩関連資料で將軍家への献氷が言及されていない（大正時代まで金沢の人々は知らなかった？）ことは、研究者にとって未解明の関心のひとつである。

江戸城には吹上庭園に氷室があり、六月朔日に將軍家は御三家を筆頭として家臣団に氷室の氷（初期には富士山の雪）を下給していたことが知られている（<sup>7</sup>『徳川礼典録』）。加賀藩が季節物の雪氷を献上品として届けるという実務的行為の趣旨から、この荷運びに藩主や上級武士が直接加わることはなかったであろう。大奥女中からの明治期の聞き書きからは、「氷とは申せ、是は雪塊にて、土中に埋め置きし物なればにや、土芥などの打ち雑りて頗る清からず。」（『定本江戸城大奥』）と述べられ、あまり歓迎されなかったようにみえる。これらのことが、江戸での氷献上の事柄が加賀藩文書資料で確認されないことや、地元金沢で周知されなかった理由なのかもしれない。

**雪氷利用技術者としての手木足輕** 加賀藩における手木足輕の位置付けは、庭園普請・管理と氷室の運営保守やその雪氷の扱い・運搬から離れて考えることはできない。氷室の管理運営を担当することによって手木足輕は、雪氷利用技術に関する専門的職能を持つようになり、藩の中での特殊な足輕として位置づけられるようになったのではなかろうか。

雪氷貯蔵の技術的側面から見ると、おそらく、金沢城に石造りの氷室ができたとき、もしそれが氷貯蔵用の石造りの氷室を参考にしたのであれば、利用できるような量の雪氷貯蔵をすぐには実現できなかったのではなかろうか。雪と氷の貯氷技術には相違がある。さまざまな試行錯誤の末に、手木足輕は要領を身につけて安定した雪氷貯蔵ができるようになったはずだ。このことは、氷室の設置時期と貯蔵雪氷の利用時期にずれが生じる可能性を意味する。

竹井が『金沢の氷室と雪氷利用』で実験的に確認したことは、氷の融解に関与する3つの熱交換要素「熱伝導」「放射」「空気の対流」の中では、「空気の対流」が大きく関与していることである。つまり、雪氷の貯蔵や運搬で最も重要なことは、いかに雪氷を対流する空気に触れさせないかである。氷室の構造において雪氷を空気に触れさせずいかに融け水を処理して貯蔵するか、雪氷の運搬で空気に触れないように如何に容器に収めて運ぶかなどは、経験や技術に裏付けられた雪氷取り扱いの技能が必要である。

雪氷の運搬に際しては、<sup>15</sup>「荷造りは如何にして其の氷の解けぬ様構へしおや知らず」（『定本江戸城大奥』）と大奥の関係者の証言として（どのように融けないように工夫しているのか）と不思議がらせ、<sup>3</sup>「金澤から江戸迄の長い道中を長持ちの中に木の葉や笹を以て氷を詰め足輕が運んだ」（古老の話）「むかし天然氷は笹と笹の葉で幾重にも包んで、二重の桐の長持ちに納め、」（井上雪『金沢の風習』）などの聞き書きからは、技術的観点からの詳細は不明である。それ以前に、冬期間の雪氷を夏期まで貯蔵し利用できるように管理することの詳細は、職人的な経験知識や技能を要したはずである。つまり手木足輕は、氷室と絡めて考えるとき、雪氷利用の技術職能集団であったと考えるのが妥当である。このような技術職能的な視点から、加賀藩手木足輕の特異性・特殊性は注目されてもいいのではなかろうか。

江戸時代に全国各地で氷や雪の貯蔵が行われていたが、気候的に適した場所に設けられ

たはずの貯氷貯雪施設も、工夫なしで簡単に稼働できたとは思えない。明治期以降に全国で展開された氷室の管理運用や雪氷の利用についての苦労は、氷業史を扱った文献に詳しいが、よりよい氷を夏場に提供する技術的側面では、貯氷や貯雪に従事する技能を持つ職能人の存在無くしては語れない。天然氷事業者の聞き取り調査などには、過酷な労働と技術的な挑戦が少なからず報告されている（『都祁の氷池と氷室』）。古代大和の都祁氷室には貯氷に従事した人たちがいたとされるが、都祁地域の天理市福住で開催された第 20 回福住氷室まつり(2018)では、復元氷室に 3 トンの仕込みで 7 月の氷室開きに 1 トンが残存した。奈良県御所市葛小中学校 5 年生徒の氷室体験学習では、700kg の仕込みで 13 回目(2017) 114kg、14 回目の今年は 11kg が残存した。これらの試みは、一時期残存氷が得られなかった時があり、仕込み量や気候温暖化傾向の要素なども含めて、高度な技術が必要なのである。現在、関東・中部地方で営業されているいくつかの天然氷の氷室貯氷は、その職業的技術の高さもあって氷が安定的に供給されている。

雪や氷を氷室・雪室のような穴蔵に貯蔵する場合には、貯蔵雪氷の風雨除けの覆いや融け水の排水、貯蔵雪氷の量や納め方など多くの技術的要請がある。この視点からも、加賀藩手木足輕が貯雪に関与した技能集団であったことは指摘されるべきであろう。石川県でも、明治期から昭和 20 年代までは、多くの氷室・雪穴が営まれたことが県統計書や聞き取り調査資料などから確認できる。近代的製氷工場からの氷供給や電気冷蔵庫の普及によりその役割を終えるまでは、夏場の冷却材利用に氷室・雪室の雪氷が民間に供されていた歴史がある（北島『金沢の氷室』、竹井『大正期における石川県の氷室（雪室）と鮮魚鉄道輸送』『石川県の氷室（雪室）の調査リスト』）。このような歴史の中で、貯雪利雪技能者の手木足輕であった人々は、明治期に一定の役割を演じたはずに違いないのだが、その詳細を知る事はもはや望めない。

## おわりに

本稿は、「手木足輕」と加賀藩に設置された「氷室」について、その実態の解明に資するため加賀藩関連資料をもとに関連事項を整理したものである。「剛力」「大男」などの「器量」が要求された「手木足輕」が、単に加賀藩が営んだ大名庭園の管理運営のみを目的とした足輕として配置され維持されていたとは考えにくい。加賀藩手木足輕は、雪貯蔵施設「氷室」を管理運営するために配置されていた。その結果として雪氷貯蔵と夏場の雪氷利用の取り扱いに高度な専門的技術を編み出し、夏場の潤沢な雪氷利用の有用性（贈答品・接待・葬送など）を加賀藩が認識するようになった。そのことにより、「手木足輕」をして、加賀藩のみに存在した独特の専門職足輕に位置づけられることになったのではないのか。加賀藩における手木足輕のような存在は、他藩で類例があるのかどうかは不明である。資料整理した範囲では、加賀藩手木足輕は庭園管理とともに雪氷利用技術者としての特異な役割を担った加賀藩独特の足輕であった、というのが本稿の提案している仮説である。

加賀藩手木足輕は、地元金沢と江戸とで 60 人を超える人数がいたとされるが、明治維新で加賀藩が消失した後にその「器量」や「技能」をどのように生かしていったのであろうか。『石川県の力石』の記述に、小矢部の「前田藩のお抱え武士お手強(近衛兵)」であった「浅井権兵衛」は、その後北海道に渡ったという。たとえば庭師として、雪氷職人として、荷運搬業者として、彼は歴史をどのように刻んだのであろうか。



## 注

### 1) 『金澤古蹟志』 卷十二、46-48 頁。

「○**手木足輕来歴** 手木足輕は、舊藩中露地奉行の支配にて、城内等の御露地方の諸事を専務とし、藩侯江戸参観の時は荷物(モノ)の宰領を勤めけり。或は云ふ。むかし宰領足輕と称する輕率あり。是即ち今云ふ。手木足輕の事なランかと。按ずるに、岸原恵規の筆記に、三壺記の撰者山田四郎右衛門は宰領足輕也。最前は此名目の足輕有之。とも見えて、宰領足輕と手木足輕とは、別組なりしかど、宰領足輕を止められし時、其の勤向をば手木足輕へ兼勤せ占められられたるならん。又手木足輕は、戦場にては長巻とて太刀を持ち力戦する身分なり。故に召抱えの時力量の検査ありて、殊に大男を選擧せり。若し力量もなく、小男なる者は、親跡なり共、割場足輕の平の分に加えるゝ例なりといへり。(途中略)抑々手木足輕は、舊藩中は藩侯の御露地掛りなるにより、泉水築山を造り、庭地の庭造りを勤めとす。故に藩士の居邸なる庭造りも、手木足輕を雇うて造らしめたり。(途中略)舊説に、手木足輕はもと相撲組なり。故に大男の力有る者を選擧する例にて、後々までも相撲者の風俗残り、世人も力者と呼べりと。平次おもふに、後の手木足輕は、利常卿寛永年中に玉泉院丸の露地を造らしめられし相撲組の末にて、彼の時より露地庭造りを勤向となし、相撲の事は後に停止せられしと聞ゆ。(後略)」

### 2) 『金澤古蹟志』 卷四、36-38 頁。

「○**玉泉院丸氷室** 此の氷室は、舊藩中は藩侯の召上がらるゝ氷雪を貯ふる室にて、玉泉院丸の築山の麓に、二間に四間許の穴蔵を造り、戸室石にて積み立てり。右氷室は手木足輕の主附にて、毎歳厳寒の頃清潔なる積雪を箱詰になし、此の室に納め、夥多の雪を集め箱の廻りを詰め置き、六月朔日に取出し差上ぐる例なりしと云ふ。右氷室は、舊藩五世参議綱紀卿の時命ぜられたる處にて、其の以前は加州石川郡倉谷より進獻すといへり。(後略)」

### 3) 天野米作「日本に於ける製氷の歴史に就て」「冷凍」Vol.1, No.2, 25-29, (1926).

「其後凍氷に関する歴史的の興味は彼の百萬石の大名加賀前田侯が毎年六月一日に徳川幕府へ献上した事蹟であります。前田家に仕えていた古老の話に依ると徳川幕府への獻氷は寛永年間前田三代の主利常公に初まり徳川十四代家茂公頃迄年々行はれたと云うことであります。金澤城内二の丸に二間四方の穴蔵が造られ冬期當番の足輕(手木足輕)が毎日雪を其穴蔵に詰め込み貯蔵したもので獻氷の際には金澤から江戸迄の長い道中を長持の中に木の葉や笹を以て氷を詰め足輕が擔て運んだとのことであります。今から思へば随分御苦勞な事であります。後には今の本郷帝大敷地内(元前田侯敷地)に氷室を造り冬の間に金澤から氷を運んで貯蔵して置き献上する様になったと云ふことであります。献上された氷は一丈四方角五六寸の長さに切られて大奥の者共に分配されたさうであるが暑い時に氷は非常に珍重がられ皆喜で食べたと云う事です。」

### 4) 後藤彦三郎『金城深秘録』、p.16.

「一、御居間先下御石垣御泉水高辺の御石垣積方、半鶴・半切合并切合之様を用ひ、何も細成績方被仰付候義は、城責に作策・手木両品有之。作策は甲州にて米倉丹後作り出せり。手木は往昔無之舁、微妙院様御代より出来仕候哉之様奉存候。手木長さ二三尺計先をほそめ木刀之様にして、城乗之節石垣へ指込々々段々上る也。御居間先等御石垣、何も積方細に被仰付候義と考合仕候所、右手木始りと御年限符号仕候様にも奉存候。(略)右手木と申もの出来に付、所依而往昔築置候御石垣少あらず積方の所も御座候。左様の所は御普請之節は手木の心得を以て積直可申義にも御座候哉。(略)」

### 5) 『金澤古蹟志』、卷十二、46 頁。

「○**手木町** 此の地は、舊藩中は手木足輕の組地成り。此の人々をば世人御手こと呼縁。故に町名をも御手木ノ町とも稱す。元禄六年の侍帳にも、本多圖書邸地安房守下屋敷御手木ノ町方斗有。按ずるに、延寶の金澤圖を見るに、此の地邊悉く皆三十人組及び小頭の組地なるよし記載す。されば延寶の後三十人組の組地を移転し、其の跡地をば手木足輕の組地と成したるものなりと聞こゆ。三十人組は、藩侯の御手廻りと稱する



小者にて、手木足輕とは異也。」

- 6) 桑野貢三「仙洞御所「お冷やし」参観記」、『冷凍』、Vol.71, No.826, 95-99, (1996).  
「さざえ山の南を通して待望の「お冷やし」に至る。「氷室」と書かれた案内板があり、生け垣で囲まれた内側に氷室はあった。周囲を石積みとして2段に掘り下げられてあり、まず地上から1.5m下がり、その下に幅2m・長さ4m・深さ2m余りが貯氷庫になっている。底まで石段がついているので、底の部分は2m×3m程度だろう。使用していたころは地上部に屋根が掛けられ、さらに貯氷部には相当厚く保温した蓋が掛けられていたのだろう。」(お冷やし目測図あり、縦5.5m×横3.5m×深さ4m)
- 7) 『徳川礼典録』に、江戸時代の徳川家の六月朔日氷室の御祝儀に関連して  
「一、吹上御庭氷室之氷御三家方へ急度(表向に而は無之事)被遣旨被御出候ニ付、御三家休息所へ御側衆相越申達之、但御品ハ御同朋頭持出之。  
一、老中若年寄之吹上氷室之氷被下段、御側衆申聞頂戴之、何も御礼申上之。  
一、老中若年寄へ氷餅下之(御側衆始奥向之面々へも被下之)」
- 8) 和泉薫、河島克久、石坂雅昭、納口恭明「江戸時代における雪氷献上の雪氷・気候学的検討」第22回寒冷地技術シンポジウム2006年概要集,526-530:(27都府県での江戸時代における領主への雪氷献上が、調査整理されて発表された。)
- 9) 安永四年(1775)舟木長左衛門(舟木安信)『五節句集解』  
「六月朔日氷室之事。氷室とは去年の雪を貯置穴蔵の名なり。仁徳天皇六十二年關鷄野と云所の稲置大山主と云者初而作り出せる所也。同仁徳天皇の御代鷹初而日本に渡る。大和国百舌野の御狩の時皇子氷室觀覽有之其故を聞召。還御の時天主に奉り給ふ。是より毎年六月朔日被召しより初る也。中華にても去年の雪を貯置て夏月用る事ありと見へり。公方様には富士山より被為召。御家にては江戸金沢にても御庭の内に被仰付毎年申也。亦六月朔日白山の百姓金沢町犀川橋江持出売事あり。」(大友信子他『加賀藩料理人舟木伝内編著集』桂書房, p.78 (2006)。
- 10) 後藤家文書 後藤彦三郎『高石垣等之事』p.334  
「一、玉泉院様丸御長屋御同人様御座所に相成候に付被仰付候様相心得居候所左にあらず。寛永十六年中納言様御隠居以後被仰付候義ハ寛文二年 公辺へ御絵図を以御石垣孕所等御届御文言之内中納言隠居以後土蔵造候刻地がち仕候得者其ひゞき二而崩候と相調有之候。然者前段ニ相心得居候趣ハ相違二候。右御土蔵御出来之節氷室も被仰付様ニ被存候。鼠多門と御名目なれ共御土蔵と申ても同様多門ハ長屋之事也。」
- 11) 『政隣記』宝暦5年6月朔日  
「一、前記二月五日等ニ有之通、御目付松平頼母殿能州為巡検、今朝六半時供揃ニラ五時御出発、(途中省略)御郡奉行・改作奉行・所々之奉行ハ其支配所へ出、氷一桶今朝日遣、懸り組頭致挨拶相達。  
一、同日、大河内善兵衛殿へも饅頭一箱<sup>包のし</sup>・氷一桶 組頭致挨拶相達。」
- 12) 『大梁公日記』安永二年六月朔日、4、74頁。  
「○例年之通今日氷室ニ付、左京太夫(松平輝高、老中)へ氷遣候様致度候、將又板倉(勝清、老中)方茂何卒所望之旨、順阿弥(同朋頭)方昨日太郎右衛門迄紙面に而申来ル、板倉ハ従是毎年ト有之候而者ヅニ例も出来候而難相成候間、當年切之事ニ候へハ格別之事ニ候へハ格別之事ニ候間、役人共へ可相達旨及返事處、勿論當年切之事之旨、順阿弥より返書到来、依之右京へ遣候通、氷一壺・鯁筋一籠充、同様ニ相贈候事、今朝未明遣」
- 13) 田口哲也、『氷の文化史』冷凍食品新聞社、(1994)；林大介『ヒートポンプ式空調機器開発の歴史(1)』中部電力技術開発ニュース、No.96、27-29(2002).: (「江戸時代には1773年の加賀藩御納戸日記に、蓄えておいた雪氷を用いて「客殿の冷装」を行ったとの記述があり、これが日本の冷房の始めと考えられます」)。
- 14) 齊藤月岑、『東都歳時記』、天保九年(1838)刊：  
「六月朔日 氷室御祝儀(賜氷の節)加州候御藩邸に氷室ありて今日氷献上あり。町家にて、舊年寒水を以て製したる餅を食してこれに比らふ。」(朝倉治彦校注、東洋文庫177『東都歳時記2』初版10刷、平凡社、p.74 (1987))

15)永島今四郎編『定本江戸城大奥』人物往来社、1968、(p.50)：

「加州家より氷室の献上あり。女中一同へ分け下さる。此の献上物始めお広敷に着して、ここにて荷を解きほどき、御前には器に入れて差し出すが故に、荷造りは如何にして其の氷の解けぬ様構へしやを知らず。また氷とは申せ、是は雪塊にて、土中に埋め置きし物なればにや、土芥などの打ち雑りて頗る清からず。されば御台所はお手を付けず分け下さるゝなり。」(明治 25 年：朝野新聞に「千代田城大奥」と題して連載されたもの。)

## 参考文献

- 竹井「氷室関係論文」は北陸大学機関リポジトリ(<https://hokuriku.repo.nii.ac.jp>)で参照可能。竹井巖「金沢の氷室と雪氷利用」『北陸大学紀要』, 28,49-62(2004).; 竹井巖「石川県における石川県の氷室(雪室)と雪氷利用」『北陸大学紀要』, 30,107-120 (2006).; 竹井巖「大正期における明治大正期の氷室と鮮魚鉄道輸送」『北陸大学紀要』, 32,155-166 (2008).; 竹井巖、神田健三、小川弘司「石川県の氷室(雪室)の調査リスト」『北陸大学紀要』, 33,109-124 (2009).; 竹井巖「金沢「氷室」考」『北陸大学紀要』, 34, 81-98 (2010).
- 図史料『築城図屏風』(名古屋市博物館蔵)  
図史料『延宝金沢図』(石川県立博物館所蔵)  
図史料『金沢城御殿絵図』(金沢市立玉川図書館蔵)  
図史料『宝暦 5 年玉泉院丸絵図』(金沢市立玉川図書館蔵)  
財団法人前田育徳會『加賀藩史料』(昭和 4 年-)清文堂(復刻版),1970.  
森田平次『金澤古蹟史』(明治 24 年)歴史図書社(復刻),1976.  
天野米作「日本に於ける製氷の歴史に就て」『冷凍』Vol.1, No.2, 25-29, (1926, (大正 15 年))  
佐藤宏一「手木の系譜」仙台藩白老元陣屋資料館『館報』第 3 号、8-16, (1997).  
高島慎助『石川の力石』(第 2 版)岩田書店,2014.  
石川県金沢城調査研究所編『よみがえる金沢城 2』北國新聞社,平成 21 年.  
日本海文化叢書 3『金沢城郭史料—加賀藩穴生方後藤家文書—』(金沢大学日本海文化研究室編) 石川県図書館協会,1976.  
金沢市史編さん委員会編『金沢市史』資料編 4,平成 11 年(1999). (『陣殉の制規』『合戦備押』『天保年間 若年寄役の勤方例規(抄)』)  
金沢城史料叢書 10『金沢城跡石垣修築工事報告書—玉泉院丸南西石垣—(本文編)』石川県土木部公園緑地課・石川県金沢城調査研究所,平成 22 年(2010).  
桑野貢三「仙洞御所「お冷やし」参観記」『冷凍』,Vol.71, No.826, 95-99, (1996).  
宮崎勝美『大名屋敷と江戸遺跡』山川出版社, 2008.  
西秋良宏「「加賀殿探訪—東京大学本郷キャンパスの遺跡」展」『Ouroboros』, 第 11 号,(2000). ([http://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DKankoub/ouroboros/05\\_01/top.html](http://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DKankoub/ouroboros/05_01/top.html)).  
『金沢城二の丸跡発掘調査概報』石川県教育委員会,1970.  
小川孜成、『兼六公園誌』近田太三郎刊行, 明治 27 年(1894).  
石川県図書館協会発行：『三壺聞記』『可観小説』『国格類聚』『鶴村日記』『改作所舊記』『金城深秘録』  
加越能叢書第六回配本『加賀藩御定書』(前・後編)金沢文化協会,昭和 11 年。  
津田政隣『政隣記』(高木喜美子校訂・編集) 桂書房,2013.  
『大梁公日記』(校訂長山直治、(公財)前田育徳会尊経閣文庫編集)八木書店,2012.  
田口哲也『氷の文化史』冷凍食品新聞社,1994.  
梁沈約撰『宋書』(第二冊卷十四、志第五禮二)中華書局刊,(p.411).  
日本古典文学大系『日本書紀 上』岩波書店、昭和 42 年,(pp.413-415).

新編増補国史大系（普及版）『延喜式』（後編）吉川弘分館、昭和 49 年(pp.896-903).  
『徳川実紀』（黒板勝美校訂『続国史大系』（第 9-11 卷）経済雑誌社、明治 35 年(1904).  
徳川黎明会編『徳川礼典録』（上巻）原書房、1982(p.181：将軍徳川家禮典録卷之六).  
黒川道祐『日次紀事』貞享二年(1685)：(谷川健一編、解題・校訂広瀬千紗子『日本庶民生  
活史料集成』（第二十三巻年中行事）三一書房、1981.)  
大友祐子他編『加賀藩料理人舟木伝内編著集』桂書房、2006：(安永 4 年(1775)『五節句集  
解』 p.78).  
斉藤月岑『東都歳時記』、天保九年(1838)刊：(朝倉治彦校注、東洋文庫 177『東都歳時記 2』  
初版 10 刷，平凡社、p.74, (1987).)  
太田南甫編『ひともと草 上巻』、寛政 11 年(1799)：(森銑三他監修『新燕石十種 第二巻』  
中央公論社、p.373-374,昭和 56 年(1981).)  
和田篤憲「雲助考」『交通文化』, 9, 896-900,(1940).  
井上薫「都祁の氷池と氷室」大阪歴史学会『ヒストリア』,85,(1979).  
北島俊郎「金沢の氷室」『加越民俗研究』, 1, 72-81,(1982).